TADOKU JUNIOR　オズの魔法使い　★★★☆☆ ふつう　892語

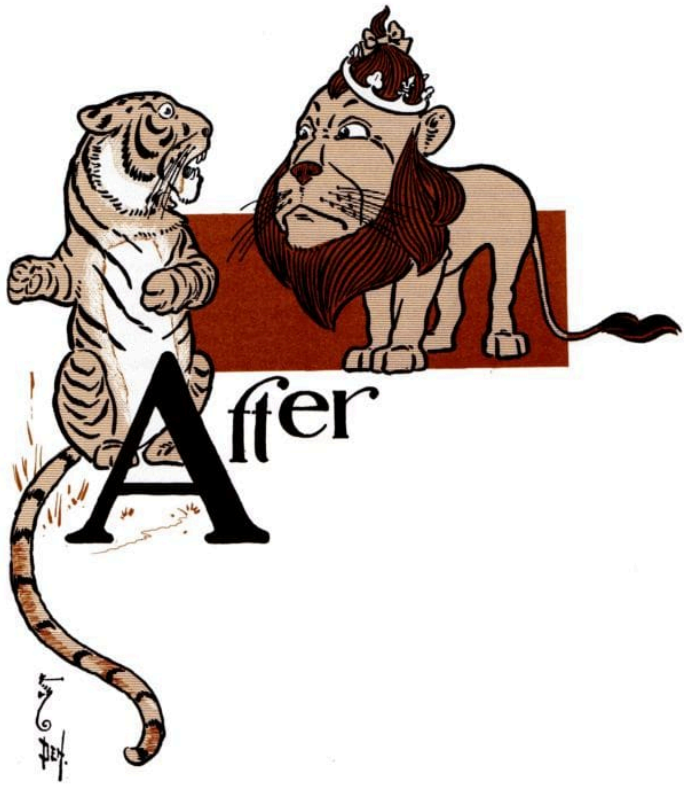
The Lion Becomes the King of Beasts

第21章　ライオン、けものの王になる

L. Frank Baum（1900年の本）　原文そのまま　朗読：Phil Chenevert

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　新しい森で、動物たちはクモのようなおそろしいかいぶつにこまっていました。「けものの王さま」とよばれたライオンは、ひとりでたたかいに向かいます。



After climbing down from the china wall the travellers found themselves in a disagreeable country, full of bogs and marshes and covered with tall, rank grass. It was difficult to walk far without falling into muddy holes, for the grass was so thick that it hid them from sight. However, by carefully picking their way, they got safely along until they reached solid ground. But here the country seemed wilder than ever, and after a long and tiresome walk through the underbrush they entered another forest, where the trees were bigger and older than any they had ever seen.

"This forest is perfectly delightful," declared the Lion, looking around him with joy; "never have I seen a more beautiful place."

"It seems gloomy," said the Scarecrow.

"Not a bit of it," answered the Lion; "I should like to live here all my life. See how soft the dried leaves are under your feet and how rich and green the moss is that clings to these old trees. Surely no wild beast could wish a pleasanter home."

"Perhaps there are wild beasts in the forest now," said Dorothy.

"I suppose there are," returned the Lion; "but I do not see any of them about."

They walked through the forest until it became too dark to go any farther. Dorothy and Toto and the Lion lay down to sleep, while the Woodman and the Scarecrow kept watch over them as usual.

When morning came they started again. Before they had gone far they heard a low rumble, as of the growling of many wild animals. Toto whimpered a little but none of the others was frightened and they kept along the well-trodden path until they came to an opening in the wood, in which were gathered hundreds of beasts of every variety. There were tigers and elephants and bears and wolves and foxes and all the others in the natural history, and for a moment Dorothy was afraid. But the Lion explained that the animals were holding a meeting, and he judged by their snarling and growling that they were in great trouble.

As he spoke several of the beasts caught sight of him, and at once the great assemblage hushed as if by magic. The biggest of the tigers came up to the Lion and bowed, saying,



"Welcome, O King of Beasts! You have come in good time to fight our enemy and bring peace to all the animals of the forest once more."

"What is your trouble?" asked the Lion, quietly.

"We are all threatened," answered the tiger, "by a fierce enemy which has lately come into this forest. It is a most tremendous monster, like a great spider, with a body as big as an elephant and legs as long as a tree trunk. It has eight of these long legs, and as the monster crawls through the forest he seizes an animal with a leg and drags it to his mouth, where he eats it as a spider does a fly. Not one of us is safe while this fierce creature is alive, and we had called a meeting to decide how to take care of ourselves when you came among us."

The Lion thought for a moment.

"Are there any other lions in this forest?" he asked.

"No; there were some, but the monster has eaten them all. And, besides, they were none of them nearly so large and brave as you."

"If I put an end to your enemy will you bow down to me and obey me as King of the Forest?" enquired the Lion.

"We will do that gladly," returned the tiger; and all the other beasts roared with a mighty roar: "We will!"

"Where is this great spider of yours now?" asked the Lion.

"Yonder, among the oak trees," said the tiger, pointing with his fore-foot.

"Take good care of these friends of mine," said the Lion, "and I will go at once to fight the monster."

He bade his comrades good-bye and marched proudly away to do battle with the enemy.

The great spider was lying asleep when the Lion found him, and it looked so ugly that its foe turned up his nose in disgust. Its legs were quite as long as the tiger had said, and it's body covered with coarse black hair. It had a great mouth, with a row of sharp teeth a foot long; but its head was joined to the pudgy body by a neck as slender as a wasp's waist. This gave the Lion a hint of the best way to attack the creature, and as he knew it was easier to fight it asleep than awake, he gave a great spring and landed directly upon the monster's back. Then, with one blow of his heavy paw, all armed with sharp claws, he knocked the spider's head from its body. Jumping down, he watched it until the long legs stopped wiggling, when he knew it was quite dead.

The Lion went back to the opening where the beasts of the forest were waiting for him and said, proudly, "You need fear your enemy no longer."

Then the beasts bowed down to the Lion as their King, and he promised to come back and rule over them as soon as Dorothy was safely on her way to Kansas.

せとものの かべを下りると、旅人たちは、いやな感じの土地に出ました。ぬまやどろ地がいっぱいで、背の高い草がぼうぼうにおいしげっています。草がとてもこくしげって、どろの穴をかくしてしまうので、穴に落ちずに遠くまで歩くのはたいへんでした。それでも足もとをよく見ながら進んだので、しっかりした地面にたどり着くまで、無事に歩いていけました。けれどもここは、これまで以上にあれた土地のようでした。やぶの中を長いこと、うんざりするほど歩いたあと、一行はまた別の森に入りました。そこの木は、これまで見たどの木よりも大きく、古いものでした。

「この森はじつにすばらしい。」とライオンは、うれしそうにあたりを見回して言いました。「こんなに美しい所は見たことがない。」

「なんだか暗くて、気味が悪いよ。」とかかしが言いました。

「とんでもない。」とライオンは答えました。「ぼくは一生ここに住みたいくらいだ。足もとのかれ葉がどんなにやわらかいか、古い木にはりついたコケがどんなにこく、青々としているか、見てごらんよ。けものなら、これ以上すてきなすみかはのぞまないだろう。」

「もしかしたら、今もこの森には、けものがいるかもしれないわ。」とドロシーが言いました。

「いるだろうね。」とライオンは答えました。「でも、このあたりには一ぴきも見えないよ。」

一行は、暗くてそれ以上進めなくなるまで、森の中を歩きました。ドロシーとトトとライオンは横になってねむり、きこりとかかしは、いつものようにみんなの見はりをしました。

朝になると、一行はまた出発しました。少し進んだところで、たくさんのけものがうなっているような、ひくいゴロゴロという音が聞こえてきました。トトは少しクンクン鳴きましたが、ほかのみんなはこわがらず、よくふみかためられた小道を進んでいきました。すると森の中のひらけた場所に出て、そこには、ありとあらゆる種類のけものが何百ぴきも集まっていました。トラやゾウやクマやオオカミやキツネ、それに動物図かんにのっているあらゆる動物がいて、ドロシーは一しゅんこわくなりました。けれどもライオンは、動物たちは会議を開いているのだと説明しました。そして、うなったりほえたりしているようすから、たいへんこまっているのだろうと考えました。

ライオンが話しているうちに、何びきかのけものがライオンに気づきました。するとたちまち、大きな集まりは、まほうにかかったようにしんとしずまりました。トラの中で一番大きなトラがライオンのところへやって来て、おじぎをして言いました。

「ようこそ、けものの王さま！ちょうどよいときに来てくださいました。わたしたちの敵とたたかって、森のすべての動物に、もう一度平和を取りもどしてください。」

「何にこまっているのかね？」とライオンはしずかにたずねました。

「わたしたちはみんな、おびやかされているのです。」とトラは答えました。「近ごろこの森にやって来た、おそろしい敵に。それは、とてつもなく大きなかいぶつで、大きなクモのような形をしていて、体はゾウほども大きく、足は木のみきほどの長さがあります。その長い足が八本あって、かいぶつは森をはい回り

ながら、足で動物をつかまえて口まで引きよせ、クモがハエを食べるように食べてしまうのです。このおそろしい生き物が生きているかぎり、だれ一人安心できません。それで、どうやって身を守るかを決めるために会議を開いていたところへ、あなたがいらしたのです。」

ライオンは少しのあいだ考えました。

「この森には、ほかにライオンはいるのかね？」とたずねました。

「いいえ。何頭かいましたが、かいぶつがみんな食べてしまいました。それに、どのライオンも、あなたほど大きくて勇かんではありませんでした。」

「もしわたしが君たちの敵をやっつけたら、わたしにおじぎをして、森の王としてしたがってくれるかね？」とライオンはたずねました。

「よろこんでそういたします。」とトラは答えました。ほかのけものたちもみんな、大きな声でほえました。「そうします！」

「その大グモは、今どこにいるのかね？」とライオンはたずねました。

「あそこの、カシの木のあいだです。」とトラは前足で指して言いました。

「わたしの友だちを、よく守っておいてくれ。」とライオンは言いました。「わたしはすぐに、かいぶつとたたかいに行く。」

ライオンは仲間たちにわかれを告げ、敵とたたかうため、いさましく進んでいきました。

ライオンが見つけたとき、大グモはねむっていました。そのすがたがあまりにみにくいので、ライオンは思わず顔をしかめました。足はトラが言ったとおりに長く、体はごわごわした黒い毛におおわれていました。大きな口には、長さ三十センチほどもあるするどい歯がならんでいました。けれども、頭とずんぐりした体をつないでいるのは、ハチのこしのように細い首でした。これを見て、ライオンはこの生き物をおそうのに一番よい方法を思いつきました。起きているときより、ねむっているときのほうがたたかいやすいとわかっていたので、大きくとびはねて、かいぶつの背中の真上に飛び乗りました。そして、するどいつめのある重い前足で一げき、クモの頭を体から打ち落としました。飛び下りて見ていると、やがて長い足が動かなくなったので、すっかり死んだのだとわかりました。

ライオンは、森のけものたちが待っているひらけた場所へもどり、とくいそうに言いました。「もう敵をおそれることはないぞ。」

するとけものたちは、ライオンを王としておじぎをしました。ライオンは、ドロシーが無事にカンザスへ向かったら、すぐにもどって来て、みんなをおさめると約束しました。

たんご と クイズ　第21章　ライオン、けものの王になる

forest 森	moss コケ	tigers トラ
elephants ゾウ	spider クモ	King 王さま
claws つめ		

Q1 森の動物たちをこまらせていたのは？

① 大きなクモのようなかいぶつ　② うでのないハンマーヘッド　③ 悪いまじょ

Q2 ライオンがかいぶつをおそったのは、かいぶつが何をしているとき？

① ごはんを食べているとき　② ねむっているとき　③ 歌っているとき

Q3 ライオンが森にもどって王になるのは、いつ？

① すぐに　② 来年の春　③ ドロシーが無事にカンザスへ向かったあと

こたえ

Q1　①　ゾウほどの大きな体と、木のみきのように長い足を八本もつ、クモのようなかいぶつでした。

Q2　②　起きているときより、ねむっているときのほうがたたかいやすいと考えて、背中に飛び乗りました。

Q3　③　ドロシーを最後まで見送ってから、森にもどって来て動物たちをおさめると約束しました。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #43936（L. Frank Baum、1900年）。パブリックドメイン。
挿絵：W. W. Denslow（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：Phil Chenevert（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。